

メディアセンターの主な出来事（平成 21 年度）

メディアセンター（本部）

1. 新図書館システム（KOSMOSIII）への移行
平成 20 年度に選定したパッケージシステム Aleph・Primo(イスラエルの Ex Libris 社製)への移行作業を、次期システム・プロジェクト室(平成 20 年 12 月設置)を中心に進め、予定通り 3 月 23 日に閲覧サービスの提供を開始した。続いて利用者用検索システムおよび発注・受入・目録・予算管理等の諸モジュールを順次稼働させ、4 月初めには新しい図書館システム（KOSMOSIII）として全面的な運用を開始する見通しが立った。利用者用検索システムは、電子媒体か紙等の伝統的媒体かを問わず検索することができる KOSMOS をサービスの前面に出し、蔵書に限定した検索システム KEIO-OPAC と併用できる形とした。
稼働初期特有の問題はいくつか発生しているものの、大きな問題とはなっておらず安定稼働に向け努力を傾注している。
2. 学内学術情報のデジタル化と学内外への発信
国立情報学研究所（NII）の第 2 期 CSI 事業最終年度（2 年次）の委託を受け、機関リポジトリ（KOARA）のコンテンツを拡充した。また XooNips を基盤としたリポジトリシステムの開発実験を他大学と連携して進めた。
Google ブック検索プロジェクトの第 3 年次作業を進め、メディアセンター本部は、デジタル化された成果物を学内外へ提供するためのストレージサーバの設定準備を行った。
3. 電子ジャーナルのあり方についての検討
電子ジャーナル利用検討委員会が 5 月に塾長への要望書を提出して終結した。同要望書に基づき、学内外に向けて電子ジャーナル問題に関する新しい取り組みを始めた。部内では、メディアセンター所長の下に委員会・ワーキンググループを再組織し問題解決に向け検討を行った。
4. 薬学メディアセンターのシステム統合
年度初めに芝共立キャンパスにおけるすべての図書館サービスが図書館システム KOSMOSII で提供されることとなった。平成 20 年度より進めていた書誌・所蔵データの統合作業は 9 月に完了し、6 キャンパス一体のサービス提供体制が整った。また、発注から目録作成までのテクニカル系業務は、他地区と同様にメディアセンター本部に統合した。

5. 蔵書目録週及事業の継続

書誌情報が未だ電子媒体で存在しない三田メディアセンター所蔵の学部図書を中心に、計 22,567 冊の週及入力を実施した。

6. 「中期計画 2006-2010」の中間評価

来館型と非来館型双方の図書館利用要求に応える重点サービス群の優先順位付けと見直しのために、平成 20 年度に実施した図書館利用者調査（LibQUAL+[®]）結果の分析を踏まえて、「中期計画 2006-2010」の中間評価を行い、7 月に公にした。

三田メディアセンター

1. Google ブック検索プロジェクトへの取り組み

2007 年 7 月に立ち上がった Google ブック検索プロジェクトについては、平成 21 年 5 月から旧分類図書を始めとする対象資料のスキャニングを本格的に開始した。スキャニングに当たっては、毎日一定量の資料を配送し、また戻ってくる資料の管理も必要になってくる。このための専任スタッフを 1 名置き、効率よく Google 社との物流を進めている。ブックコンディション委員による点検で資料状態も適宜チェックを実施、スケジュール面では順調に進んでおり、次年度前半には和装本のスキャニングに移行できる見込みである。

2. 展示に明け暮れた 1 年

2008 年秋の義塾創立 150 年記念式典のあと、記念展示に向かうことになった。2009 年 1 月に東京国立博物館で「未来をひらく福澤論吉展」が開催され、その後、福岡、大阪と巡回した。慶應義塾図書館からは、111 点に及ぶ資料を展示に貸出した。多数の図書館資料と同時に、グーテンベルク聖書も 9 年ぶり、かつ初めて東京を離れて展示された。

秋には同じく創立 150 年記念の高橋誠一郎浮世絵コレクション展「夢と追憶の江戸」が開催され、当方の浮世絵コレクションから 3 期にわけ、305 点を展示した。恒例の丸善での展示では、ヴァレリーの晩年の書簡及び恋愛詩篇『コロニラ』を初公開。1980 年代に購入したものの、遺族の意向で非公開としてきたものである。また、「梅田晴夫万年筆コレクション」展示（丸善にて、2010 年 3 月）も寄贈後初の外部公開であった。

さらに、丸善にグーテンベルク聖書を貸出展示、泉鏡花記念館（金沢市）に泉鏡花遺品の数々を、鶴岡市の致道博物館に庄内藩関係資料を貸し出すな

ど、展示で華やいだ1年だった。

3. 貴重書、特殊資料の保存と利用

(株)プリザベーション・テクノロジーズ・ジャパンによる脱酸処理を「時事新報」をはじめとする慶應義塾関連資料に施した。

昨年来整理を進めていた旧改造社資料（山本実彦関連資料）は、その大半を『改造社出版関係資料』として雄松堂出版からDVD刊行を行い、利用の便を図った(2010年2月)。展覧会の折に撮影をおこなった高橋浮世絵のポジフィルムは、防湿庫を購入して保存することとした。

「三田文学ライブラリー」については、研究者の助言を得て、選定基準の改訂を行い、次年度目録刊行に向け、再整理を開始している。長く未整理であった「中鉢正美(元経済学部教授)原爆資料コレクション」は、当時の関係者や経済学部と調整のうえ、雑誌・図書以外の原資料、聴き取り資料等を広島市および広島大学平和科学研究センターに譲渡した。

4. 南館図書室再編—サービス・施設の見直し

2～3月に実施された南館全体の機能再配置事業の一環で、1階と地下3・4階に分かれていた南館図書室について、1階図書室を地下2階フロアに移すという抜本的改善を行った。このことにより、地下2・3・4階での図書室一体化が実現され、サービスカウンターを地下3階に集約することができた。南館図書室1階のカウンターは旧館3階に移設し、それを機に旧館の環境改善を図った。

利用者サービスの面では、1階のコーナー撤収と同時に2月2日でビデオカメラ貸出サービスおよびビデオ編集環境の提供を終了した。これは、学生による破損・紛失の頻度が高く、また本来意図していた授業利用よりもサークル活動など趣味的な利用が多かったため、メディアセンターのサービスとしての継続停止に踏み切ったものである。

また、平成15年度より文部科学省よりの補助金によって継続してきた学期期間中の日曜開館については、補助金が打ち切られたことを契機に実態見直しを実施、9月～10月の学期中の日曜日（計5回）を休館として運用した。

日吉メディアセンター

1. 新システムの稼働

2007年3月以来慶應義塾大学出版会に貸与していた旧選書室・蔵書編成室が6月1日に返還され、その後にメディアセンター本部次期システムプロジェクト室が入り、システム移行の準備を進めた。

また日吉図書館地下情報処理室に本部管轄の新システム用のサーバー等を設置した。新システムは3月23日に全塾メディアセンターで運用を開始したが、その準備のため3月20日は臨時休館とした。システム移行を機に、貸出規則を一部改定した。

2. 日吉保存書庫の開設と資料移動

通称桜並木アプローチ地下に、全塾メディアセンターの保存書庫として「日吉保存書庫」(約12万冊収容)が開設された。9月に山中資料センター、白楽サテライトライブラリー、日吉図書館地下書庫から資料を搬入し、10月1日に正式運用を開始した。保存書庫への移動により空きスペースが出来た地下書庫に、書庫狭隘化対策として4階からレファレンスブックおよび雑誌を移動した。

3. 学生の利用環境向上

2008年度全塾的に実施したLibQUAL+®(利用者要求調査)での個別図書館集計の結果を受け止め、9月に調整予算を利用して2階と3階の西側閲覧室の机を、一人ずつの仕切りのついたものに入れ替えた。2階に関しては部分的に椅子も刷新。全186席。更に従来2人用であった協生館図書室の閲覧机にもパーティションを設置して、1人の空間を維持できるようにした。また館内への蓋付きの飲み物の持ち込み、閲覧席での利用を可能にした(7月1日実施)。ただしパソコンエリアおよびAVコーナーは除外した。

4. 学生の読書推進

読書推奨活動の一環として、1階ラウンジで「教員のオススメ本—大学に入ったら読みたい本」、「塾生が塾生にススめる本」の展示を行った。こうした活動の成果は貸出冊数の増大という目に見える成果を生み、日吉図書館の年間貸出冊数は、過去最高の前年度を更に4%上回って181,006冊を記録した。

5. 情報リテラシープログラム関連

教養研究センターとの共同の学習支援活動の一環として昨年試行した学習相談アワーの本格運用を開始し、春学期は6月8日～7月10日、秋学期は10月5日～1月15日の平日13:00～18:00に、レファレンスデスクに「アカデミックスキルズ」既修者による学習相談窓口を設けた。春学期の相談件数は25日間で60件、秋学期は57日間で119件である。3月末には“CLAアーカイブズ21”として活動報告書「図書館に展開する半学半教の場作り」が教養研究センターより刊行された。また10月14日と11月4日には図書館内でアカデミックスキルズ公開講座を開催し、続いて1月8日から2月10日ま

で、1階ラウンジで学習相談員による企画で「レポートに困っていませんか?」の展示を行った。

6. 協生館図書室

経営管理研究科図書館から引き継いだ業務も含め、協生館図書室の業務を標準的なメディアセンター業務の一連の流れの中に位置づけるための業務調整を行った。同時に久しく行われていなかった蔵書点検も実施し、データ整備も行った。

7. その他

- ・10月1日～6日に丸善本店で開催された第22回慶應義塾図書館貴重書展「現代フランス文学受容と展開：ヴァレリー、コクトーの未公開草稿を中心に」に日吉図書館の蔵書から以下の3点を出品した。
 - ・Louis Aragon. “Feu de joie” (1920)
 - ・Paul Eluard. “L’evidence poetique” の草稿 (1935～36)
 - ・Andre Breton. Letter autographe a Tiroux Yamanaka (1935)
- ・4月に日吉図書館のウェブページをリニューアルして公開、続けて5月には協生館図書室のウェブページもリニューアルして公開した。どちらもメディアセンターポータルサイトとスタイル的な連携をとった。

信濃町メディアセンター

1. 土・日曜日の全面開館

従来、第3土曜日と8月の日曜日を休館としていたが、2009年度以降、年間を通じて土・日曜日を全面開館とした。このことにより、年間の開館日数は340日となり、前年度比較で17日増え、開館総時間数では138時間増となった。入館者数（ゲートカウント）は4%増、貸出冊数は14%増であった。

2. 業務委託先変更

国際医学情報センターからキャリアパワーへ、業務委託先を変更し、管理体制、研修の強化およびコンプライアンス強化を図った。キャリアパワー執務区画と専任職員の事務室を明確に分けるため、相互貸借作業用の専任職員デスクを事務室内に移動した。

3. 資料移動

山中資料センターへの資料移動を実施した（第1次：地下製本雑誌1986～1988出版約18,000冊を山中資料センターへ9/24～30、第2次：倉庫預けレファレンス資料約8,000冊と16mmフィルム10箱分および白楽書架の貴重書類約40棚分を山中資料センターへ10/13～15）。

また、館内の製本雑誌2年分約16,300冊を、書庫2～4階から地下集密書架へ移動した（12月）。

4. 資料整理等

未整理だった大鳥蘭三郎氏（元医史学教授）からの寄贈図書（大鳥文庫）の書誌・所蔵を登録・整理し、白楽サテライトライブラリへ配架した。

また、同ライブラリに保存している古医書富士川文庫のうち113冊をKOARA-A（慶應義塾大学学術情報リポジトリ）へ登録、引き続き109冊をデジタル化のためにメディアセンター本部に撮影依頼した。

5. ドイツ医学中央図書館との互惠協定締結

ドイツ医学中央図書館と信濃町メディアセンターとの互惠協定（reciprocal agreement）を、医学部教授会の承認を得て締結した。

6. KOMPASのインターネット公開

信濃町メディアセンターを事務局として構築・維持している医療・健康情報サイトKOMPASを、インターネットを介して一般公開した。

理工学メディアセンター

1. 利用者ニーズの探索

LibQUAL[®]の量的・質的分析およびレファレンス資料の利用度調査を行い、利用者の要望や不満を分析した。これに基づき、利用環境の整備を行った。

2. 学習環境整備

「学習支援強化のための3カ年計画」の2カ年目として、2008年度から引き続き、図書館のスペース作りに重点を置いた。

レファレンス資料については、利用のない資料を別置き、ハンドブックなど読み物的要素の強い資料は貸出可能な一般書架へ配置した。これにより、レファレンスコレクションを縮小し、一箇所に集約することができた。

データベース化され利用されなくなった抄録索引誌約8,000冊を白楽サテライトライブラリーへ、雑誌約27,000冊、図書約7,000冊を山中資料センターへ移動した。その結果、一般図書を分かりやすく再配置することができたほか、図書については今後10年、雑誌については5年分の増加に対応できる書庫スペースを確保できた。さらに、学生からの要望が強かったグループ学習室を設置し、個人用ブースも増設することができた。

3. 蔵書構築

学部学生用に、語学学習、留学、就職、資格、プレゼンテーション等の資料を積極的に購入し、学習支援コーナーを新たに設けた。

4. 電子ジャーナルの充実

LibQUAL+[®]により電子ジャーナルの充実が強く望まれていることが確認できたため、Nature, Elsevier, Wiley, IOP などバックファイルの充実に努めた。

5. 機関リポジトリの研究開発

DSpace を使った機関リポジトリ「ΣStar」を立ち上げた。また、これまで独自に運用をしていた「学位論文データベース」を「ΣStar」に統合した。

湘南藤沢メディアセンター

1. 新しい利用者サービスの開拓・実現

メディアセンターの専門資料を活用する大学院生向けのサービスを開拓・実現するため、自分の研究やメディアセンターの利用に関する個別インタビューを開始した。2009 年度の実績は 4 名にとどまり業務にフィードバックできるレベルには達しなかったが、これにより大学院生の資料やメディアセンターの利用動向を具体的に把握することができ、得られる情報は有益であることが確認できた。当面はこのインタビューを継続し、情報や知見を蓄積していくこととする。

2. 利用者サービスの改善・向上

2008 年度に全塾メディアセンターで実施した利用者調査（“LibQUAL+[®]”）の調査結果を元に、利用

者サービスの改善を実施した。学部生からは個人用机を望む声が高いことから、1 階の閲覧席の一部にパーティションを設置した。大学院生は特に健康マネジメント研究科において資料の不足に対する不満の傾向が顕著であったが、看護医療学図書室だけでは対応に限界があるため、信濃町メディアセンターとの連携を始めた。

3. 利用環境（設備）の改善

館内各所の施設案内サインの改善を実施した。また、2 室あるキャレールームのうち 1 室でのパソコンの利用を認め、これによって稼働率を上げることができた。

4. 雑誌（逐次刊行物）の見直し

全塾的な書庫狭隘化対策として、すでに継続受入を中止している外国雑誌の保存の見直しを行い、その一部を山中資料センター、白楽サテライトライブラリーへ移動したほか、他地区および電子媒体との重複について調整を進めた。

5. マルチメディア環境の充実

貸出用機材の更新、湘南藤沢 ITC の PC リプレーン機器構成の仕様策定と機材選定への協力により、撮影から編集、視聴までの一連の流れのハイビジョン対応を実現した。キャンパス内の教室等に設置されているモニターをブラウン管 TV から液晶モニターに変更し、効果的な映像表示環境の構築を進めた。